



『 大鍛冶屋と割鉄 』

たたら製鉄では銚（ズク）やケラを作っていました。市場に流通する割鉄（包丁鉄）は軟らかい鉄で、たたら場に付属する大鍛冶屋が製品にします。歩ケラ（小さなケラ）と銚を小炭が燃えている火久保（ほくぼ）で加熱し、同時に炭素量を調節し、真っ赤になった塊を鎚（つち）で叩いて不純物を追い出し、板状の割鉄（炭素量約0.1%）を作ります。手子（てご：加工職人）が左右からトッテンカンと鎚で鉄を鍛えています。



大鍛冶屋
ワリ鉄ヲ作ル図

割鉄（包丁鉄）

- ケラ : 金偏に母（鉤）と書きます。海綿鉄の塊。
- 海綿鉄（かいめんてつ）: 砂鉄や鉄鉱石を低温（1,000～1,100℃）で還元して得られるスポンジ状の鉄。
- 割鉄（包丁鉄）: 銚（ずく）や小さなケラ塊から細長い板状の鉄板を作ります。
- 火久保（ほくぼ）: 鉄を加熱する少し凹んだところ、火床（ほど）とも言います。
- 小炭（こずみ）: 鍛冶屋が使う炭を小炭といいます。
小炭は燃焼性が良いので鉄を加熱して鍛える工程に使われます。

たたらを経営する『鉄山師』にとって大鍛冶は非常に重要な位置を占めていました。大鍛冶の作った割鉄（包丁鉄）が製品として出荷され、市場でその品質の評価を受け価格が決定されます。又、出荷額の80%近くが割鉄で、企業の利益に直結するからです。大鍛冶の責任者、大鍛冶大工は腕を競い品質の向上を目指しました。名人・上手の大工は自由に炭素量を調整出来たと言われます。田部家に残る文書では、鍛冶大工はたたら製鉄の責任者（村下）の数倍の給料を得ていたようです。

たたら製鉄の技法は現在『日刀保たたら』（日本美術刀剣保存協会）として再現されていますが、この大鍛冶の炭素量を調整する技術は現在残っていません。一部の刀匠さんが自分用の刀の素材として大鍛冶技術を持っておられるようです。

参考資料

たたら 日本古来の製鉄 JFE 21世紀財団 2004年
絵巻物巻物は『先大津阿川村山砂鉄洗取の図』です。
鐵の道を往く 鐵の道文化圏推進協議会
山陰中央新報社 2001年3月31日

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
<http://www.kanamonoya.co.jp/>
ryou@memenet.or.jp

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！